

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月28日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2009～2011

課題番号：21242020

研究課題名（和文） 植民地大学の総合的研究——制度・機能・遺産

研究課題名（英文） An Interdisciplinary Study of Colonial Universities:
Institution, Function and Legacies

研究代表者 酒井 哲哉（SAKAI TETSUYA）

東京大学大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20162266

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは、帝国日本における植民地大学に関する学際的研究を、目的としている。各メンバーは、研究計画に従って、植民地大学の制度と理念、植民地大学における学問とそれらが持つ政治的機能、そして、第二次大戦後の植民地大学の遺産について、研究を進めた。また、本プロジェクトを通して、歴史学、教育学、政治学、法学、国際関係論など、さまざまな専門分野の研究者間の学術交流が実現した。われわれは、その研究成果を書籍として2013年秋に刊行する予定である。

研究成果の概要（英文）：This project aims at the interdisciplinary study of the colonial universities in Imperial Japan. According to the research plan, each member has studied ideas and institutions of the colonial universities, academic studies in the colonial universities and their political functions, and the legacies of the colonial universities after the Second World War Through this project, academic communications among researchers of various disciplines including history, pedagogy, political sciences, legal studies and international relations have been materialized. We are going to publish the research product as a book in autumn 2013.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	8,000,000	2,400,000	10,400,000
2010年度	7,200,000	2,160,000	9,360,000
2011年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
年度			
年度			
総計	19,200,000	5,760,000	24,960,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：帝国・植民地・教育史・帝国大学・京城帝大・台北帝大・日本近代史

1. 研究開始当初の背景

本研究計画は、京城帝大・台北帝大を中心とする日本の植民地大学の制度・機能・遺産を、学際的視点から解明するものである。植民地高等教育機関については、これまで散発的な言及はなされてきたものの、纏まった本格的な研究はほとんどなかった。しかしながら、近年ようやく、日本・韓国・台湾において、それぞれの視点から植民地期の知的制度を実証的に解明しつつ、戦後への継承関係を内在的に捉える研究動向が生まれてきた。

京城帝大・台北帝大を中心とする日本の植民地高等教育機関の制度・機能・遺産については、先行研究としては、教育史からの研究として馬越徹の『韓国近代大学の成立と展開』（名古屋大学出版会、1995）があり、「日本型植民地大学」の典型例として、京城帝大を、日本統治下における「朝鮮国立大学」設置運動などと比較しながら検討しているが、朝鮮・韓国の事例に限定されており、台北帝大の事例や、より広い帝国研究の文脈での位置づけは未解決のままになっている。また、戦前期日本の諸学問における帝國的認識空間の位相を広く扱ったものとして『岩波講座・「帝国」日本の学知』全8巻（岩波書店、2006）があるが、同講座は「学知」の文脈的理解に焦点が置かれているため、植民地大学についてはいくつかの論文が言及しているにとどまり、植民地高等教育機関に関する体系的な考察とはいえない。従って、植民地大学の総合的研究はいまだ着手されておらず、今後解決されるべき課題となっていた。

以上のような背景から、帝国日本の植民地大学に関する学際的研究の必要性を感じた研究者が集まり、研究会を立ち上げ、本研究計画を開始した。

2. 研究の目的

こうした背景を踏まえたうえで、本研究計画では、実証的な大学史研究としての水準を満たす研究を遂行すると同時に、統治構造や帝國的認識空間の位相を視野に入れた政治的・社会的文脈のなかに植民地大学の機能を位置づけ、問題の広がり多様性を浮き彫りにするように努めた。また、第二次大戦終結後の韓国・台湾における高等教育機関への影響や、技術移転・文化蝕変など地域形成に関わる知的インフラの形成に与えた影響についても考察する。西欧植民地大学との比較や、日本の公式帝国の外部にあった満州国の建国大学のような事例や、米国州立大学をモデルにして設立されながら復帰後日本の国立大学として編入された琉球大学の事例など、関連する事例との比較史的視点も重視した。

3. 研究の方法

主題の多面的な性格に伴い、さまざまな分野の研究者から協力が必要と判断し、教育史・政治史・思想史など学際的手法による解明を試みた。また、海外の研究者との交流も極力推進するようにした。研究期間中は、隔月で研究会を開催し、相互の研究交流に努めるようにした。

1990年代以降、日本の学界では、帝国史・植民地史の研究が盛んになり、政治史・経済史・社会運動史というような従来の個別研究を横断するような研究動向が生じている。また韓国・台湾においても、植民地期の知的制度を実証的に解明しつつ、戦後への継承関係を内在的に捉える研究動向が生まれている。このため、これまでは評価の対立する主題であるため、重要性は意識されながらも十分に研究がなされてこなかった本研究計画のような分野においても、国際的共同研究の気運が熟している。こうした実績を生かして、本研究計画は、東アジア地域間の文化交流の歴史的背景を考えるため不可欠な植民地高等教育機関の制度・機能・遺産を、日本・韓国・台湾の国際的共同研究により再検討することで、東アジア諸国における相互の歴史的理解をすすめることを重視した。

4. 研究成果

各自がそれぞれの分野で研究論文を執筆

し、これを一冊の研究書に纏めた。2013 年秋に公刊される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

酒井哲哉、東アジアの地域主義構想—近代日本における<圏域>の思想、『社会思想史研究』第 35 号、2011 年、査読有、60—76

酒井哲哉、紹介・伊藤信哉『近代日本の外交論壇と外交史学—戦前期の『外交時報』と外交史教育』、『国際法外交雑誌』第 110 巻第 3 号、査読有、2011 年 11 月、177—181

酒井哲哉、第 II 部 『思想』一〇〇〇号記念連続座談会 思想の一〇〇年をたどる — 一九四五—一六五年 戦後の思想空間、(『思想』編集部編、『『思想』の軌跡 1921—2011』、査読無、岩波書店、2012 年、94—127

中生勝美、日本占領期の人類学史：GHQ の応用人類学、ヨーゼフ・クライナー編『近代<日本意識>の成立：民俗学・民族学の貢献』東京堂出版、査読無、2012、228—247

中生勝美、戦時中における国分直一の台湾研究：オーラルヒストリーから『国際常民文化研究機構年報』3 巻、査読有、2012、181—209、

中生勝美、戦時中の日本民族学：岡正雄の民族研究所』ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の戦前と戦後：岡正雄と日本民族学の草分け』東京堂出版、査読無、2013、143—174、

中生勝美、台北帝国大学土俗・人種学研究室の研究活動、酒井哲哉・松田利彦編『帝国と高等教育：東アジアの文脈から』国際日本文化研究センター、査読無、2013、115—127

中生勝美、「大東亜共栄圏」の民族学：民族の戦争利用『国際常民文化研究叢書 4』、査読無、2013、83—97、

浅野豊美、森山茂徳・原田環編『大韓帝国の保護と併合』、東京大学出版会、2013 年 2

月。「国際関係の中の『保護』と『併合』——門戸開放原則と日韓の地域的結合をめぐって」、査読無、227—253

石川健治、「第 4 章国会・総説」 芹沢斉・市川正人・阪口正二郎編『新基本法コンメンタール憲法』、査読無、293—297. (平成 23 年 10 月、日本評論社)

石川健治、「第 41 条」、査読無、平成 23 年 10 月 日本評論社芹沢斉・市川正人・阪口正二郎編『新基本法コンメンタール憲法』297—306

松田利彦 植民地の近代と民衆
趙景達編『植民地朝鮮 その現実と解放への道』(東京堂出版)、査読無、2011、122—148

松田利彦、総力戦体制の形成と展開
趙景達編『植民地朝鮮 その現実と解放への道』(東京堂出版)、査読無、2011、210—232

松田利彦、植民地警察はいかにして生みだされたか—日本の朝鮮侵略と警察、林田敏子・大日方純夫編『近代ヨーロッパの探究 13 警察』(ミネルヴァ書房)、査読無、2012、369—416

石川裕之「韓国高等教育の現在 (9) 入試改革①—大学入試制度の概要—」『文部科学教育通信』第 272 号、2011 年、16—17 (査読無し)

石川裕之「韓国高等教育の現在 (10) 入試改革②—入学査定官制—」『文部科学教育通信』第 273 号、2011 年、10—11 (査読無し)

石川裕之「韓国の教育制度と入試政策」『韓国語ジャーナル』第 38 号、2011 年、29 (査読無し)

[学会発表] (計 9 件)

中生勝美、戦時中の日本民族学：岡正雄の民族研究所、国際シンポジウム「岡正雄：日本民族学の草分け」法政大学国際日本学研究所、2012

中生勝美、台湾離島の核廃棄物貯蔵場と住民運動：低レベル放射性物質・反対運動・津波の可能性、アジア政経学会 西日本大会、2012

中生勝美、「大東亜共栄圏」の民族学：民族の戦争利用」神奈川大学国際常民文化研究機

構第4回国際シンポジウム「二つのミンゾク学：多文化共生のための人類文化研究」2012
石川健治、憲法のなかの「外国」、平成23
年7月11日 早稲田大学比較法研究所プロ
ジェクト講演会「日本法の中の外国法」での
研究報告

松田利彦、植民地朝鮮における民衆と「近
代」、招待講演、2011年11月25日、中央研
究院台湾史研究所

松田利彦、植民地帝国の中の地域社会：朝鮮
史研究における成果と課題、国際研究集会
「植民地帝国日本における支配と地域社会」、
2011年7月14日、国際日本文化研究センタ
ー

松田利彦、比較植民地大学史の可能性／不可
可能性、国際研究集会「帝国と高等教育－東ア
ジアの文脈から」、2012年2月11日、国際日
本文化研究センター

松田利彦、植民地裁判資料の活用－韓国大法
院所蔵民事判決文を中心に、人間文化研究機
構「日本関連在外資料の調査研究」韓国班ワ
ークショップ、2012年2月13日、国際日本
文化研究センター

石川裕之「国立ソウル大学校の発展過程にみ
る植民地高等教育の『遺産』－医科大学にお
ける教員組織の変化に注目して－」、国際日
本文化研究センター国際研究集会「帝国と高
等教育－東アジアの文脈から－」、2012年2
月12日、国際日本文化研究センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井哲哉 (SAKAI TETSUYA)
東京大学大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：20162266

(2) 研究分担者

松田 吉郎 (MATSUDA YOSIROU)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：30222497
中生 勝美 (NAKAO KATSUMI)
桜美林大学・人文学系・教授
研究者番号：00222159
飯島 渉 (IIJIMA WATARU)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：70221744
浅野 豊美 (ASANO TOKYMI)
中京大学・国際教養学部・教授
研究者番号：60308244
石川健治 (ISHIKAWA KENJI)

東京大学大学院・法学政治学研究科
・教授

研究者番号：40176160

米谷 匡史 (YONETANI MASAFUMI)

東京外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80251312

松田利彦 (MATSUDA TOSHIHIKO)

国際日本文化研究センター研究部・准教
授

研究者番号：50252408

瀧井一博 (TAKII KAZUHIRO)

国際日本文化研究センター研究部・准教
授

研究者番号：80273514

石川裕之 (ISHIKAWA HIROYUKI)

畿央大学・教育学部・准教授

研究者番号：30512016

(3) 連携研究者

なし